庵野秀明

Hideaki Anno

☆

ロングインタビュー　Part I

☆

欠落を埋めようとする作業が、僕は、生きるってことだと思います。

多くの謎を残したまま終了したTV版エヴァンゲリオン。
ゲンドウは本当はシンジを愛してる？
使徒って何？など、疑問は尽きませんが、
やはりJとしてはカヲルとシンジの関係が
なぜああなったの？
というのがまず知りたいこと。



☆

一九六〇年、山口県出身。「風の谷のナウシカ」で巨神兵の溶解シーンを作画、注目を集める。84年、ガイナックス設立に参加、同社の第一回作品「王立宇宙軍オネアミスの翼」で作画監督を担当。その後、OVA「トップをねらえ！」で初めて監督・脚本を手がける。TVシリーズでの監督作は「エヴァンゲリオン」の他、「ふしぎの海のナディア」。現在は、初の長編実写映画「ラブ・ポップ」（原作／村上龍）を準備中。

広報担当の佐藤さんもまじえ、
弐拾四話を中心に3時間に及んだ
庵野監督へのインタビューから、まずは、
カヲルとシンジの㊙エピソードや、
監督の表現者としてのこだわりを
語った部分を収録します。
（小説JUNE96年8月号より再録）

◆JUNEとかって読まないんですよ◆

佐藤　たまたまとりあげていただいた号が出た次の週があれ（弐拾四話）でしたからね。何か見てみようかなと思った人のハートをわし掴みにしたんじゃないかなと（笑）

――あの回はマンガ家とか書き手の人の間でも電話やＦＡＸが飛び交って、あそこまでやってくれるかって感じですごく盛り上がってます。

監督は脚本も書かれてますけど、カヲル君のなかなか嬉しいセリフはどうやって生まれたものでしょう？

庵野　うーん、あれどうやって書いたかなあ。けっこう自然に出たな。

――自然に出たんですか（笑）何かリサーチなさったとかは。

庵野　ないです。ＪＵＮＥとかって読まないんですよ。

――じゃあ逆に自分が口説く時、あるいは口説かれる時、ああいう感じで言われると嬉しいかなとか。「君の心はガラスのように」とか言っちゃったり言われちゃったり、何か、実際あったということはないんですか？

庵野　いやあ、ないですね。

――お風呂場で手を握られてしまったとか。

庵野　そういうのは男はないんですよ。女は、この年だと多少の経験はありますから。

――女の子と風呂に入るのはいいよね、と「ニュータイプ」でおっしゃってましたけど。

佐藤　はっはっは（笑）

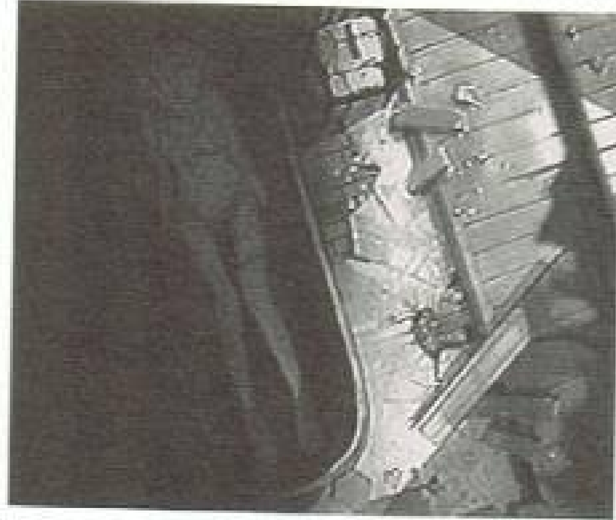
庵野　うん、いいと思いますよ。

――そっけないお返事（笑）あれ、部屋の中とかではなくて最初からお風呂場に？

庵野　中学生ぐらいの時だったら、友達と銭湯によく行ったりしてるでしょ。学校帰りとかに。あと、海へ遊びに行ったあとそのまま行くとか。田舎のほうは銭湯多いんで。男の社交場みたいな感じで。まあ、一緒に背中洗いあうとか、そういうスキンシップな部分というのはないんですけどね。とりあえずみんなで一緒に行くような、ダーってそこで遊んで帰るみたいなところです。もうちょ



▶キャラがこれほどお風呂に入るアニメも珍しいかも。ミサトの風呂好きはむろん、10話では温泉も登場



◀24話ではネルフ銭湯のほかに、失踪したアスカが廃墟のひからびたバスタブに入っている、という場面も。風呂＝子宮という監督の言葉に納得、の演出

◆とにかく疲れたんで、遊びがほしかった◆

っと健康的なイメージだったんですけど（笑）

——「温泉ペンギン」が出てますし、ミサトもお風呂が好きなんでしたっけ？　お風呂というか水の中は気持ちがいいという感じで。

庵野　そうですね。胎内回帰のイメージもあるんですけど。風呂の中というのは。

——そういう意味で言うとアニメで疲れて帰ってやっぱりお風呂に入ると。

庵野　いや、風呂はいいと思いますよ（笑）

——で、富士山とネルフのマークが交互に出るというのが、やっぱり楽しかったんですけど。桶に全部ネルフマークがついているのも。

庵野　ええ。それも逆さまについてますよね。とにかく疲れてたんで、遊びがほしかったんですよ。

——あれはなかなかいいなあと。

佐藤　風呂に入りたいっていう気持ちが集中してたのかもしれませんね（笑）

——ネルフのお風呂のスタッフってどういう人たちなんだろう。制服があるんでしょうか。動力源は？（笑）

庵野　やっぱり原子力ですよ（笑）原子力の残り湯だと思いますよ。２次冷却水あたりで充分だと思いますから。

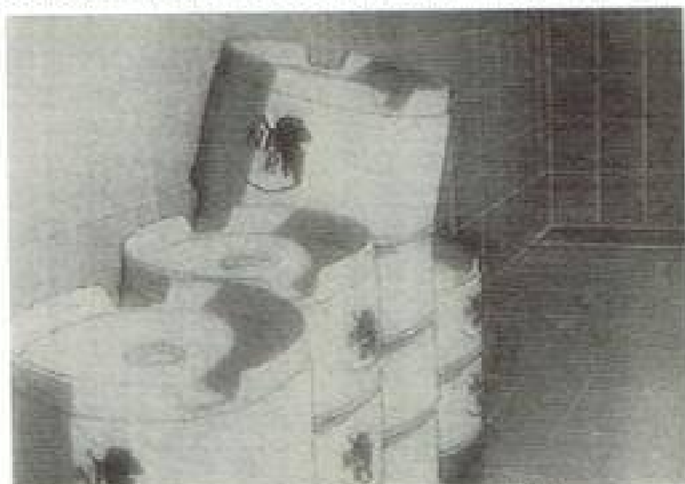
——ビデオ版であのへんがパワーアップされるというのはないですか？

庵野　シーンをちょっと足そうと思いますよ。シンジとカヲル君の話に集約しとけばいいやという感じでやったんですけど、もうちょっと余裕ができるんだったら、カヲル君とミサトだけは会わせないといかんと。レイとチラッと挨拶しただけで、あとはシンジとしか話をしてないんですよね、実は。他の人に会う必要ないんですけど、ミサトだけはちょっと会わせとかないとまずいかなあと。どういうシーンになるかちょっと思いつかないんですが。

——ああいうJUNE的というか友情を越えたような演出っていうのは、自然にああいう感じに出てきたって、さっきおっしゃってましたが。



▲ウワサのネルフ温泉マーク



▲そしてケロリン…じゃなかったネルフ湯桶

◆別にシンジ君がそこで肉欲に走るわけでは（笑）◆

庵野　たぶん知る限りの、そのへんのやつを入れたんですよ。もしくは僕自身の持ってるそういう部分っていうのがその程度のもんなのかなって。

――その程度でもかなりなもの（笑）

庵野　やっぱり、スタッフにおかしいって言われましたけどね（笑）

――頬を赤らめちゃったりするというのは。やっぱり、好意示された嬉しさですか。

庵野　そうですね。別にシンジ君がそこで肉欲に走るわけではないですから（笑）

――そういう意味では向田邦子さんも小説で書いていましたけど、日本のサラリーマンとか男同士というのは外国で言えばホモと同じだ。別に肉体関係がなくても。だって会社で一緒に仕事しているほうが家に帰るより楽しいから残業して、休日も出たりしている。で、実は監督もGAINAXにいるほうが、男といるほうが楽しいということはないですか？（笑）

庵野　うーん、楽しい…そういうふうにはならないですね。まあ、楽にはなりますけど。

――女の人といるほうが疲れる？

庵野　気を使いますね。それは当然。

――サービスしなきゃいけない。

庵野　サービスとかそういうわけじゃなくて、やっぱり女性には気を使うと思いますね。気を使わなくなるまでに結構時間がかかると思いますけど。

――最初からああいう予定だったんですか。あの回にカヲル君が最後のシ者として。

庵野　オープニングにも二コマだけ出てますけど。

――オープニングを設定した時点ではあの絵しかなかったんですか。

庵野　まあ、貞本（義行）のほうのラフの絵しかまだ上がってなかったんで。ちょっと変わっちゃってますけど、本編の絵とは。

――でも役割的には同じ？

庵野　そうですね。最後の使徒は人と同じ形で少年にしようと思ってたんで。

――でも渚カヲルって名前だって、女の子でもいいわけじゃないですか。

庵野　でもあれは少年ですよ。女性っていう感覚がまるでないですもんね。シンジともう一人のシンジですから。理想のシンジが現れるんで、それは女性ではダメです。

――ああ、なるほどね。

庵野　シンジが持っているコンプレックスを全部クリアしているキャラクターですから。まあ、そのへんはちょっと描写が僕の力不足でストレートに出てないですけど。誰からも好かれるキャラクターで。初期の段階では猫を連れた美少年だったんですよ。一番最初のプロットのタイトルは「猫と転校生」。猫を連れた転校生が中学校にきて云々という話だったんですけどね。やっていくうちにもう24話では学校どころではなくなってしまったので。あれが11話から16話くらいまでのところにくるエピソードだったら、まだよかったんですけどね。

――たいてい脚本に庵野さんともうひと方クレジットされていますが、お二人の関係はどういう感じなんですか。

庵野　一緒に話してからプロットをやってもらって、脚本という形になったのを僕がもう一回、要するにアニメーション用にちょっと直すという。まあ、その時点で脚本書き送りになっちゃってたんで、その前の段階の打ち合わせの時に考えていたストーリーとかドラマとキャラクターが、その脚本が上がってくる時にはつじつまが合わなくなっているというのもあるんですよ。そういうのを合わせて直していかなきゃいけないので。僕が統一してやってますから、統一はされるんですけど。ドラマ部分のお手伝いとかですよ。

――24話はどなたが？

庵野　あれは薩川（さつかわ）（昭夫）さんという方が。薩川さんのほうが、こういう言い方はまずいですけど、ホモっ気はばっちりっス（笑）

――男の友情に厚い。

庵野　僕よりはそうかな？（笑）

◆カヲルはシンジが持っているコンプレックスを全部クリアしている◆

●薩川昭夫…脚本家。映画「屋根裏の散歩社」「押繪と旅する男」（ともに原作は江戸川乱歩）の脚本で93年にデビュー。庵野監督とは「ナディア」の編集を担当したのがきっかけで出会い、「エヴァ」では弐拾四話をはじめ全12本の脚本を執筆しています。最新作は秋に公開予定の「D坂殺人事件」（江戸川乱歩原作／実相寺昭雄監督）

●薩川昭夫脚本リスト…第3話「鳴らない、電話」第4話「雨、逃げ出した後」第5話「レイ、心のむこうに」第6話「決戦、第3新東京市」第9話「瞬間、心、重ねて」第10話「マグマダイバー」第12話「奇跡の価値は」第13話「使徒、侵入」第15話「嘘と沈黙」第19話「男の戦い」第21話「ネルフ誕生」第24話「最後のシ者」「シト新生」DEATH編

◆薩川さんのほうが、ホモっ気はばっちりッス（笑）◆

—— 薩川さんが暴走しそうになったのを庵野監督が止めた？

庵野 いや、そんなことはないです。薩川さんの雰囲気って、脚本に残ってます。薩川さんの脚本のオリジナルのほうがもっとそういう意味ではJUNEっぽかったです。

—— 例えば？

庵野 僕は風呂にしちゃったんですけど。オリジナルの脚本は川で裸で二人で泳いでたんですよ（笑）

—— 昼間ですか？

庵野 わかんない、夜だったかもしれない。

—— 夜、月の光を浴びながら？

庵野 わかんないッス。川で二人で泳ぐという美しい絵があったんですよ。さすがにこれは僕の許容範囲を越えるっていう（笑）

—— エンディングの『FLY ME TO THE MOON』の男二人バージョン（笑）

庵野 演出家も拒絶してしまって、「さすがにこれはできん」（笑）

—— そういったシーンは他には？

佐藤 あれ、チェロがあるじゃないですか。一緒に…「僕がピアノを弾くんで、君がチェロを弾きたまえよ」って。夕方の教室でポロロンッって先にカヲル君が弾いてて、そうっとシンジ君が覗くと「君も何かできるの」「今度一緒にやろうよ」みたいな感じで。「ちょっと僕が歌をうたうから」って。

庵野 そうだそうだ。人のいなくなった、疎開した後の音楽室でやるっていうのがあったんです。

—— カヲル君と音楽のイメージとの結び付きというのは？

庵野 言葉じゃないと思うんですよ。コミュニケーションとして、最初にきた時に。シンジもチェロをやって、一応音楽をやってたんですよね。それともあれは治療の一種か何か？

庵野　いや、わかんないッス。あれは脚本家の人のアイディアなんです。まあ、キャラクターがチエロって感じがするっていうそれだけですけど。

――その最初の脚本は何か形になってたりしないんですか。

庵野　なってないですね。シナリオまでです。

――ＪＵＮＥの読者がいかに喜ぶことか。やっぱりという（笑）だってせっかくおいしいキャラが出て来たと思ったら使徒だとはいえ一回でいなくなってしまうというのはあまりにも。おかげでコミケは楽しみですけど。

佐藤　この間までは「トウジ攻シンジ受」みたいなのばかりやったっていう噂なんですけれど（笑）いまは違うねんという話を聞いて。

庵野　トウジ君いなくなって、みんなカヲル君になってしまったみたいです。

――ＪＵＮＥはやっぱり一緒にピアノとチェロですよ。川のシーンも捨て難い。でもお風呂のシーンのほうがＨかもしれない。野外の川で水遊びって健康的ですね。

佐藤　しかし、どんなんか知らないけど、夜、「月の光だけで、誰も見てないよ」とか言って一緒に裸で川に入るほうが俺はちょっとアレやと思うけどな（笑）風呂で二人裸でおるのは普通やからね（笑）

庵野　ね、全裸でね。

佐藤　「君も一緒に泳ごうよ」とか「誰か見るかもしれないよ」とか、それもリバー・フェニックスの世界に入ってると俺は思うけどな（笑）

――そうですねえ。でも女の子にとってはどっちだろう。お風呂場で二人っきりのほうが、結果的にはとてもＪＵＮＥ度が高かったというか。

庵野　まあ、男風呂っていうのはまず覗けない世界ですから。禁断の領域っていう雰囲気があるのかもしれない。でも、どう見ても銭湯っスけどね（笑）

佐藤　あれがいいんちゃいます？　リアルで。

◆一緒に裸で川に入るほうが俺はちょっとアレやと思うけどな（笑）◆

●薩川昭夫さんによる、「最後のシ者」準備稿（初稿・二稿）は、別冊ＪＵＮＥ96年9月号（創刊号）に収録されてます。イラストは野火ノビタ先生

◆うちの番組見たこともないのによくできたなあ◆

——薩川さんは他の作品は？

佐藤 この間、実相寺（昭雄）先生が撮った実写の『屋根裏の散歩者』とか。嶋田久作の。

——なるほど。あれもＪＵＮＥ度がちょっとあってうちで紹介したんです。そうか。だんだんつじつまがあってきましたね（笑）

庵野 ＪＵＮＥな脚本家だったんっス。

——「シ者」で「渚」という文字面のシャレは？

庵野 あれは薩川さんです。一応、水というか海というか、水に関係するのにしてくれって。カヲルというのも薩川さんで。

——使徒っていうのは使者って言い換えてもいいわけですね。

庵野 うーん、まあ、意味合い的にはそうですね。

——「シ者」っていうのは死んでる者っていうシャレもあるんですか？

庵野 ええ、掛けことばです。

——それでシンジのほうが生きる者でカヲル君が死者であるという。

庵野 ええ。漢字にしたりカタカナにしたりしていろいろ掛けられるんです。

——カヲル君を演じた声優さんの石田彰さんも良かったですよね。

庵野 石田くん良かったっスよね。

——雰囲気あってね。石田さんには何か、こういうふうにとか指示は出したんですか。

庵野 どう言ったっけ。線を細く、優しくとかそれくらいですね。一回、テストの時はちょっとイメージ違ったんです。２回目の、こういうふうにしてくれって言った後はもうそのままＯＫです。本番はすごく良かったです。絵も何にもなくて、うちの番組見たこともないのによくできたなあって。

——監督は、少年にこだわりっていうのはありますか。

庵野 あんまりないです。

●実相寺昭雄：映画監督。TVシリーズの「ウルトラマン」『ウルトラセブン』を手がけたのち、映画に進出『帝都物語』などの作品がある。傾いた構図や画面を歪めて不安感をかきたてる手法など、独自の映像センスで知られる。



◀「屋根裏の散歩者」（脚本／薩川昭夫。明智小五郎（左）を嶋田久作さんが怪演♥）

――こういう少年だったら格好よかったのにみたいな。

庵野 いや、カヲル君はよくわかんなくなってきちゃったので、失敗したかなって気がなきにしもあらずです。ただのおかしい奴です（笑）イメージがちょっと違うんです。まあ、キャラクターとしては石田くんの声がすごく良かったので、ただ自分が考えてたのとはちょっと足らないかなと。もっと誰からも愛される、すごくいい人にしたかったんですよ。もうシンジが見たらコンプレックスを持つしかないみたいな。

――最初は猫を連れてたということですけど、どうしてそうしたんですか。

庵野 なんか変でいいじゃないですか。ウェットな感じで。転校生でがらがらって戸を開けて、猫を抱いてたら、いい絵だと思いますよ。猫を横に歩かせると作画大変なんで、ここに抱えてると（笑）

――何で猫をやめたんですか。

庵野 面倒くさいから（笑）

――じゃあ前の場合だったら、猫も一緒にEVAで潰すつもりだったんですか。それとも、猫だけは生き残るとか、形見として。

庵野 いや。イメージとしては…あとはアイディアとしては猫のほうがオリジナルの使徒で、人間のほうが傀儡（かいらい）っていうか。どっちが本物かわからないっていう。まあ、それもよくある話なので、いいやって。（編注＝SF映画の『地球の静止する日』など）

◆

庵野 正直に言うと、自分が考えてた最終回って、もうネタは使っちゃったんですよ。

――いままでの中で？

庵野 ええ。25、26話って、あれ最終回なんです。本当にそうするつもりだったんです。

――えっ!?　そうですか。

庵野 1本、量が増えちゃったんです。25話で大体の謎にカタがついたら、あとはシンジさえなん

◆カヲル君は失敗しちゃったかなって気がなきにしもあらずです◆

とかすればいいやと。

―― それでいろんな考え方がありますよというのを見せて。

庵野 ヴィジュアルの見せ方とかセリフの言い回しとか、方法論は違うんですが、根底に流れている、言いたいことっていうのは同じなんです。

―― そうなんですか。僕はまた、最後のほうで時間がつまってきたので、本来の形を不本意な形で出すよりは転んでもただでは起きないという感じで（笑）転んだけれどもちゃんと芸を見せてということかなあと思ってたんですけど。

庵野 いや、それもありますけど。でもそれはあくまで方法論のところで。劇中劇というアイディアと舞台みたいにしてしまうのはギリギリで思いついたんですが、シンジ君が他人の、表面だけじゃなくって過去を見てく、という…どんな人間でも汚い部分ってあるわけじゃないですか。でも人と付きあう時には、特にその人が嫌われたくないと思った瞬間に、パッとそこをできるだけ見せないようにすると思うんですよ。少しでもいいところを見せようと。そういうところだけ見てて判断するわけじゃなくって、その人が持ってるネガティブな部分まで見た時に、果たしてその人間をひとつの個として見られるかという。

―― まるごと受け入れることができるか、みたいな。

庵野 そうなんです。それはフロイト博士が言っている口唇期の良い母と悪い母という理屈なんですけど。要するに母親というのは自分を無条件で守ってくれると同時に自分を束縛しているという悪い部分もあるもんだと。あと母親は毎日機嫌がいいわけではないですよね。例えば自分が泣いた時には、機嫌がよければいい子いい子してくれて、泣いちゃいけませんよみたいなこと言うんだけれど、イライラしていて機嫌が悪い時は怒鳴ったりもしますよね。子供から見たら同じ人物に見えないんですよ。だからいい母親と悪い母親というのが存在していて、それがひとつの人格の中に内包されているということを認めて初めて他人っていうのが見えるんです。それをやるつもりだったんで。やるアイディアというのは全部出せたんですよ。



◀口元を隠すのは、ミステリアスな効果＋「セル枚数が少なくてすむ、というのも」

◆一回ネタを使っちゃったんできついですよね◆

――本来の予定は演劇的なものではなかった？

庵野 もうちょっとドラマの中に入れ込んで。まだ25話のほうはそこまでやる予定でやってたんですけどね。シンジが見たミサトとアスカというのをやれば、とりあえずOK。で、アスカが25話で立ち直る予定だったんですけど。だめですね、むずかしいですね。

――お父さんのゲンドウに関しては？

庵野 親父は、まあ、最終回ですね。友達とか他人の部分を25話でやって、血縁のところは最終回でやるとか。

――別に殺したりはしない？（笑）

庵野 わかんないっス。まあ、一回ネタを使っちゃったんできついですよね。同じのをもう一回やれるかどうかは…同じネタを賞味期限切れたから使うというのもあるんですけど、賞味期限切れないし、少なくともLDはカップリングで出るんで、ダブるのはできるだけ避けたいなと。

――台本を画面に映すことは最初から予定されていたわけじゃないですよね？

庵野 いや、ありましたよ。劇中劇の、最後は台本にしようって。要するにTVから出ている虚構というか。

――そうだったんですか…。では、庵野さん自身が実写で出ちゃうみたいなのは？

庵野 やろうと思ったんですけどね。ダメだって言われまして。いや、マジに半パートそれをやろうって言ってたんですけどね。局のほうから、それはやめてくれって言われまして。

ヴィジュアルの部分のクオリティがもう22話以降、維持できないというのが12月の前の段階でもわかってたんですよ。もう3カ月くらい前に、これから逆算スケジュールを切っていくと「あっもうダメだ」と。その場合に選択肢がいくつかありますよね。そのうちで一番きついのを選んだと。

――これだけ話題になった作品って、いままでないんじゃないでしょうか。

庵野 まあ、普通の終わり方をしなくて今は良かったと思いますけどね。みんなに考えさせるものになった。

◆最後は裏切ろうと思ってたんです◆

庵野　まあ、予定調和だけは避けたかったんで、最後は裏切ろうと思ってたんです。

──それで渡辺多恵子さんが裏切られたと怒って（笑）渡辺さんもすごくハマってまして、繰り返し見て、そのあと次の週はこうなるだろうという予測を立ててと。で、一時シンクロ率が400％まであがって（笑）

佐藤　とけちゃいますね。

──ところが彼女はアスカに一番感情移入して見ていたそうで。だからアスカがおかしくなっていったのがすごく納得がいかなくて、20話以降自分で描き直したいくらいだと。それで最後の2話で切れて、もうすごい怒り狂ってまして（笑）監督には絶対落とし前をつけてくれと伝えてくれと頼まれて来ました（笑）

庵野　ああ、私、渡辺さんのファンなんです。

──そうなんですってね。とにかく渡辺さんはすごくハマってて、最終回も友達と大勢で見たそうですよ。その分だけ憎しみがあって（笑）

佐藤　それは迂闊（うかつ）でしたね、渡辺さんともあろうお方が（笑）

──逆にシンクロしていたために離れられなかったというか、客観的になれなかったというか。

庵野　そうですね。あれだけ冷静に物事を見る人が、それはちょっと意外でした。ああ、じゃあ渡辺さん脚本やらないかな。

──すごい読み込んでらっしゃるから。

庵野　本当ですか。じゃあ、脚本、最初から頼んでみようかな。

佐藤　納得いかないなら、あなたがやってくださいって（笑）

庵野　まあ、渡辺さんは渡辺さんで、たぶん自分が思い描く最高のラストというのが出てくるはずなんですよ。あの人は…マンガを読んで一度だけ本人にお会いしたことがあるんですけど、お会いして話をした時に、あっ僕より数段、ストーリーテリングとかドラマの構成力とかが…3つぐらいステージが上の人だなと（笑）全然かなわない（笑）だから、たぶん渡辺さんが考えたほうが、い

いラストになる（笑）僕がやるよりはいいと思いますよ。これは正直そう思います。僕より多分うまく構成して話を作れると思うんですよ。でも、そういうふうに自分で組み立てたものは、自分のものでしかないということですよ。

――それはきっと監督のものとは違いますよね。

庵野　違いますね。そこが問題なんですよ。怒っている人も多分自分のやつがあったと思うんですけど。

――そういう意味でいうと、みんな感情移入して見るから、虚構であることを忘れたいという。もちろん知っているんだけども、できるだけ一体化したいという時に、これは夢なんだと言われちゃうとはぐらかされちゃった感じを受けたりするのかなと思うんですけど。

庵野　まあ、物足りなさは残ると思います。でも、…完結すること自体がすべてのエンドマークというもんじゃないと思うんですよ。それはもう、固定観念でしかないと思うんですよね。物語が収束しなくても、そのキャラクターだけなんとかなればいいというものもあるわけですよね。そういう固定されたものに捕らわれて云々というのも、どうかなと思うんですけど。

――ああいう形で決着がついたように見えないというのは、逃げたということになるんじゃないかと。逃げちゃだめだと言ってたのに逃げたじゃないかというふうに思われちゃっているかもしれないですね。

庵野　なんで「逃げちゃだめだ」をテーマということにするんでしょうね。

――えっ!?　…そう言われると（笑）まあ、シンジ君がいつも正しいとは限らないですからね。

庵野　ええ。なんで主人公が言って、やってることがみんな正しいと思うんでしょう。

――そうか。主人公が「逃げても良かったんだ」って言って。

庵野　ええ。テーマはそうですよ。逃げてもいいんですよ。

――そうすれば渚くんも殺さなくてすんだしっていう。

庵野　共感する人はそれでいいんですよ。逃げちゃだめだと言ってた人が逃げたということでそれ

◆…完結すること自体がすべてのエンドマークというもんじゃない◆

◆人を傷つけずに自分が前に進むことはできない◆

を糾弾するのもOKなんですよ。でも、それを正しいと思い込むなというのはありますよね。僕がやってることがみんな正しいのかと言ったら、そんなこと全然ないですよ。25、26話の中でも「逃げ出したければ逃げてもいい」ってセリフが入ってますからね。まあ、逃げ出すことによって得るものもあるし失うものもあるわけですからね。何にもしなければどっちもないですけど。それは死んでるのも同じです。そういう人がいっぱいいるみたいですけど。まあ、得るものがある以上、失うものも必ずあるんですよ。人を傷つけずに自分が前に進むことはできないですからね。それを恐れてしまったら何もできないわけですから。まあ、逃げちゃだめだというのが、OKというものでもないんです。逃げちゃだめだというのは、逃げたことによって、すっげえ嫌な目にあったからそう思ってただけで。逃げたことによって、「あっすっげえ楽になった」と思ったらそれでいいと思うんですよ。

アダルト・チルドレンっていうのは、最近僕がよく耳にする言葉ですけど、それは、ダメな両親のもとで育って、その両親に引きずられたまま大人になってしまって、親とか男とかに依存しないと生きていけなくなってしまった人たちの総称らしいんですけど。それを見ても、親から逃げ出すというか、親元を離れることによって解放される気分というのは来るんですよね。すっごい過保護な親で、「××ちゃん××ちゃん、東京に行ったら悪魔がいるから、そんなとこに行っちゃいけないよ」って自分の檻の中から絶対出さない母親っているわけじゃないですか。いつまで経っても。で、それを良しとしてその場にいたがる人はそれでいいんですけど、それがすごく窮屈でいやな気分になってる人っているわけじゃないですか。拘束されっぱなしのそんなところから逃げ出して、東京でまだフリーターでもやってその日暮らししたほうがましだって人がいるわけでしょう。そういう人はそっから逃げ出してるわけですよね。田舎からの脱出ですよね。

——逃げると言うか、脱出と言うかで全然イメージは違いますよね。

庵野　逃げ出すっていうことでは同じですよね。逃げ出すことによって自分が解放されるんだったらそれはOKなんですよ。全然OKなんです。むしろ逃げ出したほうがいいんじゃないかと僕は思いますから。まあ、シンジはいま、26話を見ればエヴァンゲリオンにとり憑かれてますよね。それにしがみつくことによって、他の人から認められて自分の存在意義もあり、になってますよね。そこから解放されればもっと別の、少なくとも次の段階が待ってる、そういうもんだと思いますよ。ただ自己への退行は袋小路への無限ループでしかないと思います。それはそれで行き着く先っていうのはそういうもんだと思いますので。袋小路に入ってしまったら、そこを蹴破るしかない。蹴破った後は次の袋小路が待ってるだけなんですけど。でも人ってそうやって生きていくしかないから、それでもしょうがないかなと思いますけど。

——シンジの場合はエヴァに乗るしかないという。ミサトたちとの繋がりも、仕事仲間になることじゃないとダメって。そういう意味で言うと、庵野さんは『エヴァ』を描かなければGAINAXにはいられないとか（笑）描くことが自分の一番得意なジャンルだし。

庵野　もうちょっと大きな、アニメーションとか、そういうもんなんですよね。最近、『エヴァ』が終わってからですね、ふと古本屋に行ったら寺山修司の『演劇論集』がありまして。今まで寺山修司って人に興味なかったんですよ、全然。何も見てないし、何も読んでないし、名前だけしか知らない。何か演劇やってた人で、押井守さんの元ネタの人だとかその程度の知識しかなかったんですよ。それでちょっと買って読んだらですね。理論はすごく面白いですよ。ああ、こりゃあ70年代の人はこっちに行くかというのはわかるんですけど。その本の中に、寺山さんが演劇をやるのは演劇という媒体をもって社会と接することができる、要するに自分は演劇というものを介さないと社会というものに接することができないんだ、とか書いてあって。ああ、それはわかります。要するに僕はアニメーションというものを通さないと社会と接することができない。まあ、それだけのことです。アニメに依存しないと自分の演技をできないってことですから。他の人とも話をすることができない。それは自分の中なにもないってことです。

◆僕はアニメーションというものを通さないと社会と接することができない◆

いです。ものすごく大きな穴です。

――その欠落を埋めるために作る？

庵野 そうです。それが表現です。すべての表現はそれです。だからデカダンスではありえないわけです。アニメーションというのはね。いや、すべての表現は僕はそうだと思います。声優さんが演技するのも、アニメーターが絵を描くのも、僕がこういう作業するのもすべてそうだと思いますけどね。

――じゃあ「補完計画」というのも、やっぱりその欠落を埋めるためなんですか。

庵野 埋めようとする作業が僕は生きるってことだと思います。

――なるほど。

庵野 ただそれは、比較的に見れば、他の人よりは僕の穴はかなり大きいって気もします。だからここまでやらないと、まだ満足しないって感じなんです。これでも満足しないですね。

（1996年4月25日、ガイナックスにて）

［こぼれエピソード］

●ネルフマークの葉っぱはイチヂクだった。
●「残酷な天使のテーゼ」の歌詞"少年よ神話になれ"は、最初の案では"凶器になれ"だった。
●24話で使われてたベートーベンの第９は、歌詞も要チェック。
●第１話の使徒・サキエルは、あさりよしとおさんの「ワッハマン」に登場するイシュタルが原形。
●ベジタリアンの庵野監督、動物クッキーも食べられないそう。

庵野秀明

Hideaki Anno

☆

ロングインタビュー　Part II

☆

僕は、人間は不安なほうが自然だと思うんです。幸せっていうのは錯覚でしかない。

小J8月号に続く、
庵野監督の最新インタビュー。
当初、前回の未収録部分から掲載する
予定でしたが、
「この間はダメ人間状態だったので」（笑）
立ち直ってきた今の心境を聞いてほしい、
との申し出をいただき、



☆

スペシャルゲスト

野火ノビタ

急きょ再インタビューが実現。
ゲストに野火ノビタ先生を迎え、
（庵野監督は野火先生のエヴァ本を
読んでいるそう）、監督のバックボーンから
放映終了直後に陥った不安までを、
うかがいました。
（別冊JUNE96年11月号より再録）

◆庵野さんと私個人が、視聴者と送り手としてファイトしてたんですね◆

庵野　（野火さんに）唐沢さんの本に書いてましたよね。正直、少し泣きました。あの文章はありがたかったです。

野火　「エヴァンゲリオン」は、私も何度も泣かされました。アニメで声を上げて肩を震わせて泣いたのは、本当に初めてです。一番最初にガーンと思ったのは14話なんです。総集編パートもうまく作ってあるなって感じなんですけど、ＣＭ明けてから、いきなりレイちゃんの独白がバーッと来るところ。うわあぁぁぁ…号泣って感じ（笑）その時に初めてピーンッと来たというか。それまでは面白いアニメとしか思ってなかったんですけど、これは私自身の問題でもあると。

――以前に野火さんが言ってたんですけど、見てる側と作る側の戦いみたいなところもあると。真剣に見ざるをえないというところで、実は自分も参加してる。

野火　非常に真剣勝負していたつもりだったんです。庵野さんと私個人が、視聴者と送り手としてファイトしてたんですね。熱く燃え上がって（笑）相手も傷ついてるが俺も傷ついてるって感じだったんですね、お互い打ってはならない秘蔵パンチを繰り出しつつ。でも、試合終了5分前ってとこで闘技場を降りられてしまった気がして。「ああっ、ちくしょう。俺はまだ戦えるのにっ！」って（笑）

庵野　そういう意味では、スタッフとも真剣勝負ですよね。一番最初の敵。まあ、喧嘩もせずに面白いものはできないですよ。うちのスタッフはきついんです。金のつながりじゃないんですよ。つまんなくなればやめるっていう。

――野火さんは、14話以前はファイトしてたんですか？　六話で「どんな顔をしていいのかわからない」ってレイが言うところとか。

野火　あれも良かったんですけど、まだドラマツルギーだけっていうか。その後ろにあるものが、14話で見えたんだと思うんですね。前半部分っていうのは、ドラマツルギーの奥にあるものを、ドラマに仕立て上げるっていうのがうまかったと思うんです。でも私が本当に感動した



▲「エヴァ」のキャラ、そして庵野監督への共感を、分裂病研究の名著「ひき裂かれた自己」に託して語る、野火さんの批評本「大人は判ってくれない」（ちなみにこのタイトルは、ムーンライダースの同名曲から）。冒頭で監督が話題にした"唐沢さんの本"（エヴァ批評アンソロジー「サード・ミレニアム」のこと。なお"唐沢さん"は唐沢俊一先生とは別の方）に収録された文章に加筆修正したもの

◆日本で一番進んでる文化は少女マンガだと思います◆

のは、あの謎解きの面白さとかではなくてですね、あの……本当に言いがたいものだったんです。

庵野　それは多分……僕、中学の時から少女マンガのファンでして。今でいうガールフレンドで、リツコさんって言う人なんですけどね（笑）あの子と知り合わなければ、いまの僕はいないっていうくらい影響を受けたんです。SFと少女マンガに引き込まれましたから。「別冊マーガレット」を読んで、くらもちふさこさんとか、市川ジュンさんや和田慎二さんとか。ギャグを描かない頃の亜月裕さんとか岩館真理子さんも。その後「りぼん」に行って太刀掛秀子さん、高橋ゆかりさんとかですね。あと、大島弓子さんの短編とか渡辺多恵子さんの「ファミリー」。「花ゆめ」「ララ」「別コミ」、一時期「ちゃお」まで行きましたから（笑）。でも、講談社系は読まなかったですね。とにかく少年マンガって読んでてつまらなかったんですよ。永井豪さんの「デビルマン」とかは読んでたんですけど。あと「アストロ球団」は面白かったです。僕の人生、「アストロ球団」ですから。一試合、完全燃焼なんですよ。その他の熱血マンガは、わかっちゃうから。先の展開が。

――ああ、少女マンガってわからないですものね。

庵野　何で好いたはれたというだけで16ページも24ページも、ヘタしたら単行本10冊もつんだろうって（笑）全然わからなくて。先も読めないんですよね。あの感覚的なところに魅かれて。

大島さんなんか本当にわからないですね。もう感性だけじゃないですか。あと、くらもちふさこさんや岩館真理子さんとか、ページを開いたら、ネームがこの位置にあるということですら、もう芸術になってるんですよ。一枚の絵として完成してるっていうんですか。日本で一番進んでる文化は少女マンガだと思いますからね。

――少女マンガをアニメ化しようと思ったことはないですか？

庵野　勝てないですよ。例えばくらもちふさこさんの少女マンガをアニメにしようなんて無理っすよ。アニメに置き換えられるような感性を持ってる演出家っていうのはいないと思うな。くらもちさんと同一でもダメなんですよ、その上をいかないと。僕はそこまで傲慢にはなれな



◀野火ノビタ先生

◆やっぱりデビルマンは否定しきれないっすね◆

いと思うんです。

野火　さっきちょっとデビルマンの話が出たんですけど、私、すぐれものにハマるとすぐ「デビルマンかっ！」って思うんですね（笑）「エヴァンゲリオン」の時もやっぱり思って（笑）何でかって言うと、シンジ君は結局お母さんが使徒になるんですよね。そうするとデビルマン（と同じ）になるわけですよね。だからシンジ君はずっと、自己について悩んでるわけなんですけど、最終的には、それが更に根底から覆されて人間であるアイデンティティも揺さぶりをかけられるのかなあと思ってたんですよ。

庵野　まあ、近いっすね。やっぱりデビルマンは否定しきれないっすね。

――お母さんは使徒なんですか？

庵野　どうなんでしょう。あとで気がついたんですけど、無意識のうちにやってたんです。ウルトラマンとかデビルマンと、同じなんですよ。人間より上の生物を倒す時にやることっていったら、相手を取り込んでしまうってことですよね。石ノ森先生も前に描いてたんですけど、「悪を倒すのに、悪の力を借りる」。まあ、使徒のコピーを作って、それに人の心を加えるってパターンです。

◆

――話は飛ぶんですけど、スタジオジブリのＬＤボックスに文章をお書きになったそうですけど、どんなことを？

庵野　結局、悪口に近いことばかりです（笑）

――庵野監督は宮崎駿監督のどういう部分を批判されたんですか？　あるいは宮崎アニメと庵野監督のアニメはどこが違うんでしょう。

庵野　基本的には一緒だと思うんです。宮さんの絵は一般性を持ってしまった。例えば、僕はもっと一般受けするアニメを作るつもりは全然ないんですよ。一般化に向かうというのは僕から見れば「サザエさん」なんですね。宮さんもどんどん丸くなっていって、今「サザエさん」



◀「完全復刻版デビルマン」
永井豪とダイナミックプロ
（全５巻／講談社／各450円）

になってるんですよね。昔の「サザエさん」は毒があったんですけど。

宮さんの最高傑作は「ナウシカ」の7巻ですよ。連載してる時は宮さんのとこへ行くと「続きはやく見せて下さいよ」って、棚に描きかけのが入ってるから見ようとしたら、「まだ見ちゃダメだ」って（笑）宮さんが部屋から出ていったら棚から出す（笑）。で、来月は「（アニメージュ）見なくていいやって（笑）もうアニメなんかやらずに、「ナウシカ」をずっと描いていてくれればいいのに、僕のために（笑）と思ったんですね。最後のあたりはドロドロやっててよかったです。行くたびこうなってて（頭を抱える）「どうやって終わらせたらいいのかわからない」って。その気持ちが今ならよくわかります。結局、僕の「エヴァンゲリオン」も、行き着くのは「デビルマン」と「ナウシカ」の7巻ですよ。まあ、思想的な部分で同じ答えに行っちゃうんでこれはしょうがないわって。

野火 私リアルタイムで映画の「ナウシカ」を見た時に、泣いちゃったんですね。でも7巻まで読んだ後にまた見たら、うーん、釈然としないいっと思って。1、2巻までが映画になってますけど、マンガの中ではその巻まででもすでに7巻に通じるような暗いものがあって。でも映画にした時に、宮崎さんはそういうものを全部切っちゃったというか。でも庵野さんは逆を行ってるんだなって（笑）庵野さんって「黒い宮崎」なのかしらって思って（笑）

――庵野監督の想定観客っていうのは？

庵野 それは昔も今もこれからも自分自身だけです。逆に自分が面白いと思わないものは他人に見せたって、面白いと思わないと思うんですよね。

野火 ただ、そこで聞きたいのは、自分だけ楽しいというんだったら、日記を書いてればいいじゃないですか。でもわざわざ公開するのは、どういう意図なんでしょう。

庵野 他人との関係というか、接点がそれしかないからでしょうね。

――広い自己満足という。

庵野 というか、作家ってやっぱり人に見せるものってオナニーしかないですよね。

◆「ナウシカ」をずっと描いていてくれればいいのに、僕のために◆



◀「風の谷のナウシカ」宮崎駿
（全7巻／徳間書店／各480円）

◆自分のオナニーショーは商売になる◆

野火　その感覚ってよくわかります。やっぱり見られてないと感じないんですよね（笑）

庵野　そういうものだと思います。人が見てるから余計いいという。ナルシストしか作家になれないですからね。自分自身にある程度自信があって、それを見せるってやつです。自信のない人というのは前を隠しちゃってますから。

――でも、その例でいくと、風俗では客のリクエストに応えてあげるというのもあるわけじゃないですか。お客さんのほうを直接してあげるというか。

庵野　だからゲームのほうに行くわけですよ。アニメのキャラを「この人俺のこと好きにならないかな」と思っているよりは、よりアクティブに、好きだとか言ってくれるわけじゃないですか、ゲームって。それが要するに出張してシゴいてあげてるっていう（笑）

――なんで自分のオナニーを見せてあげたいと？

庵野　いや、僕は自分のオナニーショーは商売になると思ったからです。それが得意技だから。

庵野　ええ。出張してやってあげる気にはならないですね。自分でやれと思いますよ。僕はフィルムにこだわる仕事ですからね。そこまでサービスする必要はないです。そこまでいったら人間、自分で何にもしないじゃないですか。

――でも人のためにしてあげてるっていう言い訳もあるじゃないですか。

庵野　人のためなんて、そんなの嘘ですよ。

――俺のオナニーを真似てやってみろと？

庵野　そこはもう、関係性は人それぞれだから。それを見て自分でマスかく人も、それは良し。それを見て顔を突き出して、ひたすらかけてくれるのを待ってるのも良し（笑）。

◆

――菜食についてうかがいたいんですが、肉を食べないのは主義なんですか？

庵野　いや、嫌いなだけです。普通の生活に興味がないですし、食うのにも興味がないんです

◆セルアニメっていう方法自体が限界だと思うんですよ◆

たんですよ。だってスタッフのおかげですから、儲かった部分はスタッフにできるだけ還元するべきでしょう。まあ、僕自身、あまり金に興味ないというのがよくわかりました。前はあまり持ってないから、興味ないと思い込んでるのかなあと思ってたけど（笑）。性欲は人並みくらいにはあると思います。男はないですが（笑）。

◆

――ＪＵＮＥで、女の人がなぜ男同士のになるかって問題を突き詰めていくと、最終的には家族問題に行き着いちゃうところがあって。だから『エヴァ』が家族問題をちゃんと描いていたので、女の人も見られたという。

庵野　いや、ちゃんとはやれてないですね。

――でも戦闘シーンと同じくらいちゃんと。

庵野　うーん。セルアニメっていう方法論自体が限界だと思うんですよ。記号論でしかないですよね。マンガもそうなんですけど、まだ自由があっていいと思うんです。セルって枠線をどうしても描かなきゃいけないんですよ。結局は枠線を描いて中を塗るっていうぬり絵なんですよね。白と黒とのああいうモノトーンの美しさっていうのは、まず少女マンガには勝てないんですよ。金属も岩もセルになったらみんな同じ質感ですから。それを叩いた時にカンカンッて音がすれば金属かな、コンコンッって音がすれば、あっ岩かっていう程度の稚拙な表現なんですよね。眉をしかめているのをパッと見たらみんな怒ってるとしか思ってくれないですよ。あとは役者に頼らざるをえないんです。だから本気で怒っているのか、わざと怒っているのかというのも、セルの一枚絵で表現できないんですよね。そういう不自由な表現の中で、人間を描くなんて至難の技なんです。でもだからこそ、こだわらないとダメだと思うんですよね、人間ドラマに。でも、やっぱり描ききれてるとは思いません、「エヴァンゲリオン」は。人間ドラマというのは、こんなに生易しいものじゃないと僕は思います。

◆



▶「ATフィールドのこじあけるイメージって、強姦ですから。服をひきちぎる感じなんです（あそこには絹を裂く音を入れてます）。人間の一番最初の防護っていうのは服じゃないですか。はだかで歩いてもいいのに、人間だけは、少なくとも陰部は隠そうとしますよね」



◀「強姦の一番最初は服を脱がすところですから。ＡＴ（Absolute Terror＝絶対恐怖領域）って、なんか怖い感じがしていいかと。自分の中の恐さですよ。絶対に人に入ってもらいたくないところ。要するに自分のなかの一番大事なものを守るものなんですよ」

――前作から「エヴァ」まで空白がありますね?

庵野　最初は何やっていいかわからなかったんですよ。頭の中では「ガンダム」「ヤマト」を越えたいとかいう思いがぐるぐる回ってて。「ナディア」が終わってから、「ナディア」を越えるものが自分の中で生まれて来なかったんです。

そのうちやっと、テレビの企画が決まって。いわゆるロボットものの各話完結の話で考えてたんですよ。「マジンガーZ」をもっとリアルにやればいいやって感じで。だんだんその程度じゃつまんなくなっちゃって。それでも何やっていいかわからなくて半年以上企画書だけ。1話の脚本に半年ぐらいかかったんです。で、2話あたりからどういうものかがちょっとずつ見えてきて。

3話は全く空白のままできなくて、5、6話が先にできてしまって、で3話に返ると「あ、だめだ、間に一本やはり入れなきゃ」ってまた4話ができてきたんです。

3話に立ち返った時に、その30分のうちにシンジとトウジ、ケンスケが仲良くなるのがおかしくなっちゃったんですよ。普通のロボットものだったら、パターンとしてその一話分の中でそのエピソードがハッピーエンドで終わらなきゃいけないんですよね。その枠のなかで終わる話として考えていたんですけど、そこから進んじゃうとあとがしんどくなるんですよ。キャラクターをより人間的にやらなきゃならなくなって、テレビアニメのカテゴリーを越えてしまうので。でも、結局そこから出ざるを得なくなって、4話を作った時に、人間をギリギリまでマジにやらなきゃいけない作品に決まっちゃったんですね。

で、7・8・9話はスタッフももう疲れてたんで、とにかく明るい話をここで入れなきゃと。重いのをやってると気も重くなるんですよね、やっぱり。スタッフがのびちゃってたから、各話完結で気が楽に進むやつを続けて。

初期はホンに2か月、コンテに2か月。僕が直すところまでいれると4・5か月、それだけ時間かけてやってましたけど、だんだんひまもなくなって、26話なんて三日ですから。あれが

◆「ナディア」を越えるものが自分の中で生まれて来なかった◆



▶「最初考えた時は設定的なものだったんです。使徒にはエヴァじゃないと歯が立たないっていう設定を作った時に、ATフィールドというのが出てきて」「自分の中でなんでこんなの作ったんだろうとその意味合いを後から考えたら、「あ、心の壁みたいなもんか」と。要するに、それが象徴しているものは何だろうって考えて、後からそこに行き着いたんです。」

精一杯ですよ。できたのは、うちのスタッフの優秀さですよ。それはすごいと思う。24話なんて3週間ですよ。摩砂雪がほとんど一人でやってたんです。3週間ひとりでやってあそこのレベルまで来るっていうのはすごいんですよ。そういうスタッフに恵まれてる。スタッフの才能のお陰です。じゃなかったらとてもとても。

――野火さんが号泣したという14話なんですが、あのレイのモノローグはどんなふうに？

庵野　14話の前半はああいうふうに総集編にしようと思ってて、後半に入った時に、レイってどういうやつだろうっていうのをずーっと忘れてたから、描かなきゃと。

16話のほうが先なんですよ、脚本は。最初はシンジと使徒がファーストコンタクトで話をするという予定だったんですけど、できなかったんです。

最初のイメージでは、いろんな国の言葉といろんな動物の鳴き声と雑多なノイズが画面の中を流れてて、そのなかで使徒が日本語にたどり着くという。で、ピッと合致したときに絵がパッと広がって、きみの思考言語というか考えてるパターンはこれでいいのかね、と聞いてくるところからスタートだったんですけど。

――カッコイイですね。

庵野　それはそれでいいなと思ったんですけど、そこで日本語を話したらおしまいだなというのがあったんです。カヲルくんというのが最初から人型で用意されてたんで、そこまで人の言葉をしゃべるのは取っておこうと。じゃあシンジが取り込まれて何するんだろうと思ったら、たぶん自分のことをじっくり考えるチャンスなんじゃないかなと。その16話の、インナースペースみたいなところが最初なんですよ。あれはわりとスラスラとできたんです。

で、レイの話になった時に、詰まったんです。全然書けなくて。レイっていうキャラクターは分裂症的にしようと思ったんですけど、書こうとした時に、思いつかなかったんですよ、何も。結局気×いを書く時には自分が気×いになるしかないんだろうなと。その時にちょっと友達と相談してですね「気×いが書いてる文章って何かないかなあ」って聞いた時に、別冊宝島

●摩砂雪…弐拾四話などで作画監督を担当。劇場版「シト新生」DEATH編も監督している。

の精神病の本、あれ貸してくれたんですよ。イージーでリーズナブルな本なんですけど（笑）その中に気×いの書いたポエムが載ってて、すごく良かったんです。詩を読んで感動したのはあれが最初に近いというぐらい。鋭利なナイフの先の光みたいな感じがあって。これは確かに常人の感覚じゃないっていう。よかったんです。今考えればそういう素養が自分にあったというだけの話なんですけど（笑）。気×いの文章を一級品と思うのは気×いだけという。それを読んでドワーッとイメージが広がって一気に書けたっていう。

あれ底本があるっていわれてますけど、じつはないんですよ。インスパイアされたものはありますけど全然別のものです。誰かの詩にすごく似てるって、それを真似したんじゃないかと言われてるんですけど、「ああ、じゃあその人も多分気×いなんだ」と（笑）。有名な詩らしいんですけどね。そういうのと同じだと言われるくらいのものが書けるなんて、俺も才能あるんじゃないかと思っちゃいますよね（笑）。

放映が終わった後はいよいよひどくなって医者に行きましたからね。マジに死ぬことまで考えましたから。空虚みたいな、存在価値が何にもない。おおげさでもなんでもなく自分のすべて賭けてたんですよ、ホントに。それが終わった後自分の中に何もないというのがわかってしまって。後で聞いたら「あ、それは自我崩壊だよ」って。すごく悪いLSDとかやったときに味わう感覚らしいんですよ。「薬もなくそれができるのはすごいことだよ」と言われて、そう今だとすごく得した気分なんですけど（笑）。ホントに死にたいのかどうか確認するのに、ここ（GAINAXの建物）の屋上に登って足を出して、バランスを前に倒れるぐらいまで持ってって、ホントに死にたいならここで死ぬはずだし、死にたくなかったら後ろに下がるだろうと、自分で確認するためにやったんですよ。まあ死に至らなかったからここにいるわけで。

最初は躁だったんだけど、鬱がどんどんひどくなって。会社の仕事場から出なくなって、トイレの時だけは外に出たけど、メシもほとんど食わなくて。人に会いたくないんだけど人に会いたいというジレンマがバーッとなって。

◆空虚みたいな、存在価値が何もない◆

「山　重い山　時間をかけて変わるもの
空　青い空　目に見えるもの　目に見えないもの
太陽　ひとつしかないもの
水　気持ちのいいこと　碇司令？
花　同じものがいっぱい　いらないものもいっぱい
空　赤い、赤い空　赤い色　赤い色は嫌い
流れる水
血　血の匂い　血を流さない女
（…）
これは誰？　これは私　私は誰？　私は何？　私は何？　私は何？　私は自分　この物体が自分
自分を作っている形　眼に見える私
でも私が私でない感じ　とても変（略）」
――第14話、綾波レイのモノローグより。

◆わかんないのに描くっていうのは僕はだめだった◆

家に帰らないんですよ。帰る手間がめんどくさいから。だからずっとここに寝泊まりして、帰るのは年に何回かしかなくて。会社にいると、トイレに行く時にスタジオ横切るんで、人に会ってしまうので、とにかく一人で考えようと思って、自分のうちに何カ月かぶりに帰ったんです。万年床だからいつでももぐりこめば済むんで、シャツとパンツ一枚で寝転がった時に、ものすごく怖い、怖い考えとしか言いようがない、そういうのに全身が包まれる感覚があって。それに包まれた時に、バッと飛び起きてあわてて服を着て、とにかくカバン持って、表通りに出て「タクシー!」。で、会社に来て、会社の自分の部屋に来て寝る。これが自我崩壊かって。死にたいとかそういう感覚でもないんですよ。なんとも言えない。逆にそれだけ本気で「エヴァンゲリオン」やってたんですよね。

――人間てどうしてそう存在理由が必要なんでしょうねえ。不安になったり。

庵野　僕は、人間は不安なほうが自然だと思うんですよ。幸せっていうのは錯覚でしかないと。

――「エヴァ」の次の作品というのは、何年後になるんでしょう?

庵野　アニメやるかどうかわかんないですよ。アニメが駄目だと思ったらさっさと引き上げちゃいます。今アニメで立て直していいもの作ろうと思ったら、相当エネルギー使わないと。若くて元気のいいのはゲームのほうにいっちゃいます。

――そういう意味で女の人ががんばってくれるといいなと思うんですけどね。

野火　やっぱり向き不向きがね。夢見る力では男の人に勝てないと思いますよ。ひとつの世界を構築して行く力が、女はちょっと。

庵野　うーん、そういうところはあると思いますけど、男も女にかなわないところはあると思います。女は女にしかわからないですよね。さんざん悩んで…アスカの生理の話って結局ストレートに描けなかったんですよね。やっぱりわかんない。わかんないのに描くっていうのは僕はだめだったんですよ。シナリオのほうではもっといろいろ書いてあったけど、バッサリ切ったと思います。22話の、洗面所でおなかを押さえてて「子供なんか絶対にいらないのに」って

セリフだけで済ませて。それ以上は描けなかった。リテイクする時にもうワンシーンだけ足そうと思ってるけど。自信がないっていうかやっちゃいけないと思うんですよね。月に一回必ず腹が痛くなるその痛さとか全然わかんないですからね。経験がないのに口先だけでやったって、女性に対して失礼だと思うんで。それでもアスカっていう女の子を出すのに、そこだけは入れたかったんですよ。できるぎりぎりの範囲ですよね。そこから先は絶対だめ。だから野火さんがアスカを描いた「絶対安全剃刀」に全然かなわん、って。貞本とふたりで「だめだ」って。

野火　毎回遺書のような気持ちで書いてました。だからやっぱりわが身を切り売りするしかないんじゃないですか。

庵野　やっぱり「エヴァ」って男の生理でできてるなと思いますよね。できるだけ女性のほうにも近づけようとは思っても、やっぱり男から見る女ですよね。他のアニメと違うのはあんまり都合よく作ってないってとこですけど、なんか擬似的なものって気がするんですよね、本当の女じゃなくて。

野火　エヴァに乗りたーいっていう男の子がいっぱい出たでしょ。そういうのに、私、庵野さん悪意を持ってたのかなって。コミケ会場で「レイちゃんはやっぱり包帯姿だよね」とか言ってる男とかの前を、私は呪詛しながら通りすぎてたんですけど（笑）、庵野さんもそうに違いないと思ってたんですけど。

庵野　うーん、いやけっこう……ああでもそれは似てますよね。俺も「死んでしまえ」と思ってたんです（一同笑）

要するに群がるしかない人というのは、ほんとにいるんだなと。オウムのシステムが身をもってわかったという。「あ、教祖になるのは簡単だな」と。

群れって嫌いなんですよ。すごく憧れる部分があるからまた嫌なんですけど。っていいながらも群れざるを得ない。一匹狼にはなれない。一匹狼になるんだったらアニメやってないですよね。

◆やっぱり「エヴァ」って男の生理でできてるなと思いますよね◆



◆フィルムもドラッグとおんなじですから◆

―依存しなきゃいけないっていうのは怖いですよね。

庵野　依存心は誰にでもあると思うんですよ。程度を越えるとまずいなと思いますけどね。フィルムもドラッグとおんなじですから。どうしても耐性と精神的依存性っていうのが問題として出てくるのはしょうがないですよね。より刺激の強いほうにみんな走ってしまう。それを見ないと気がすまないという。そういうんではドラッグ的なものは多かったと思いますけどね、うち（ガイナックス）のアニメって。

僕も今、金曜日が楽しみなんですよ。「（激走戦隊）カーレンジャー」と「こどちゃ」（「こどものおもちゃ」）なんです。「こどものおもちゃ」はビデオに録って毎回観ようっていうほどではないんです。やっぱり今一番楽しいのは「カーレンジャー」。観れればいいんですよ。この間のはちょっと保存版ですけど。

―なんだったんですか。

庵野　セルフパロディをやってて。暴走戦隊ゾクレンジャーっていう（爆笑）徹底しててよかったんですよ。わかってらっしゃるっていう。ツボを心得てて、心地よいパロディでしたね。やっぱり本物がやると違うなあ。歌まで用意してたんです。自分のとこでないとできないですよね。ちゃんとセリフまで同じにして。黄色の奴なんて「まかせんしゃい」（笑）レッドの決めポーズもちゃんとあわせてあって。一話が短いぶんぎゅうぎゅうに詰まってていいですよね。この前なんてとうとう見栄が切れなかったんですよ。要するにゾクレンジャーのほうがやってしまうので、本家のほうが見得を切る暇がない（笑）。RVロボがガッシャンって出てきて、ワンショットべつなのが入ったら、次のカットではもう合体終わってますから。テンポ早くて。

―おもちゃを買ったりしないんですか。

庵野　買いましたよ、RVロボ。オモチャ屋で、この年で買ったら子供のプレゼントだと思うから普通包むじゃないですか、「そのままでいいですか」だって。自分で買ったと思われちゃった（笑）（1996年8月2日　ガイナックスにて）

●「まかせんしゃい」…戦隊シリーズ第1作「秘密戦隊ゴレンジャー」のキレンジャーのキメ台詞